「ボケとツッコミ」

ルイ　（40 代）

75 歳になる親父は、とにかく冗談が好きだ。身内にも、他人にも、誰にでも冗談を言う。親父が冗談を言い、姉と俺がツッコみ、母が「また下らないこと言ってるわ」と呆れる。それが我が家の当たり前だった。

何年か実家に帰らない年が続き、久しぶりに去年のお盆に帰省した。夕飯の食卓で、親父が言った。

「いやあ、本当にこの生姜焼きは美味しいなあ」

数秒後、また親父が言った。

「この生姜焼きは本当に美味しいなあ」

そしてすぐ、親父はもう一度言った。

「この生姜焼きさ、すごい美味しいね」

すかさず俺は、いつも通りツッコんだ。

「いや、何回言うんだよっ！生姜焼き美味しいのは分かったよ！」

けれど、笑い声は返ってこなかった。親父はノーリアクション。母と姉はうつむいていた。親父は、認知症になっていた。母と姉は、なかなか俺に切り出せなかったのだと、あとから知らされた。

後日、家族で病院に行き、正式に診断が下りた。医師は言った。

「同じことを何度言っても、初めて聞いたように優しく受け流してあげてください。ご本人にとってはそれが一番安心なんです」

その日から、俺たちは親父への接し方を変えた。同じ話を三回聞いても、毎回初めてのふりをする。ツッコまない。穏やかで、優しくて、でもどこか他人行儀な日々が続いた。

そんなある夜だった。家族で食事をしていると親父が言った。

「この焼き魚、生きてるみたいに美味しい！」

数秒後、また親父が言った。

「いや、でもさ、本当にこの焼き魚、生きてるみたいに美味しいんだよ！」

そしてすぐ、親父はもう一度言った。

「これ本当なんだけど、焼き魚が生きてるみたいに美味しい！」

母が

「そう、良かったね美味しくて」と返す。

すると親父が寂しそうな顔で言った。

「え？今の繰り返すの、面白くなかった？」

数秒後、気づいたら、腹の底から声が出ていた。

「いや、さすがにそれは、どっちかわからねえよっ！」

認知症のボケなのか、冗談のボケなのか、こっちには判別のしようがない。マニュアル通りに優しくしていた自分たちの間抜けさも含めて、全部ひっくるめてのツッコミだった。

その一言で、張り詰めていた糸がプツンと切れた。母が吹き出し、姉が肩を震わせ、親父が「なんだよそれ」と嬉しそうに笑った。何ヶ月ぶりかで、リビングにいつもの爆笑が戻ってきた。

認知症対策の教科書のやりかた。それは正しい。正しいけれど、うちには合わなかった。親父を腫れ物に触るように扱うことは、親父を親父じゃなくしてしまうことだった。

だから決めた。俺たちはこれからも、ボケて、ツッコんで、笑い合える家族でいる。同じ話を何度かされれば「何回言うんだよ！」と全力でツッコむ。

それが、我が家の愛の形なのだ。